
少女王子さま

ちま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女王子さま

【Nコード】

N5997W

【作者名】

ちま

【あらすじ】

田舎娘のミミが、ある日いきなりお城に連れてこられて、行方不明の第二王子の身代わりを頼まれた。「無理です無理です！ つかあたし、女の子なんですけどっ!？」「大丈夫、きみだったんだから。」……ひ、人の氣にしていることを！ 王宮を舞台に繰り広げられる、天然少女と第一王子の少年の恋ものがたり。

※野いちごさんで、更新分まで全文公開中です！（・O・）
ちよこちよこ書き直しするかもです。

序章

「なんでわたしがこんな目に……？」

少女がそう呟くと、後ろで少女の髪をいじっていた侍女が、少しだけ怒ったような仕草をして鏡越しに目を覗いてきた。

「あ！だーめですよ、ミミ様。『私』なんて使っては！」

ゆっくりと子供に教えてあげるように、侍女は言葉を選びながら手を動かす。

「ルイス王子はいつも『僕』と仰ってましたわ。」

年は少女とあまり変わらないはずなのだけど、この侍女は何故かとても年上のような感じだった。

少女が決して持ち得ない、大人な雰囲気だ。

「えっ僕ですか？いやあそれは……。あ、部屋の中くらいは」

「だめですだめです！ミミ様っ！貴方は今日からルイス王子になられたのですよっ」

侍女は少女の言葉を遮って、威勢よく顔のまえで拳をつくった。

「これからは部屋だって廊下だって、何時なんどきも！湯浴み中だ

って『ルイス王子』として生活して頂きますわ!」

「ゆ、湯浴みも…!?!」

少女は困り果てたように眉を下げた。

それだともうミミという名を捨てろと言っているのか…いや、それ以前に女ということを、なのか。

「もちろんです!…あら、まあ…!」

侍女が鏡を見て、目を見開く。

ちょうど、少女の束ねた亜麻色の髪の上に、綺麗な金髪のかつらを被せたところだった。

「うえ…!」

「やっぱり瓜二つですわ。」

あまりの違和感にしかめっ面をする少女と対象に、侍女は頬を染めうっとり鏡の中の少女を見つめてきた。

「さすがですわミミ様っ!これなら誰も、ルイス王子が偽物で、しかも女の子だなんて、思いもしませんわ!」

「……はあ。」

うきうきとはりきりながら髪をとかす侍女の言葉に苦笑しながら、少女は改めて鏡に移る金髪の少年を見つめる。

そこに映るのは、16年間で見慣れた少女ではなく、少年。
少女がこんな事をするはめになってしまった発端——ルイス・キ
ト・ペルティエ。

この偉大なる王国の、第二王子であった。

田舎村にやって来た王子様＊1

緑の大国――ペルティエ王国。

その首都から南に位置するピーシランクは、小さいが暖かい気候に恵まれ、比較的過ごしやすい村であった。

それこそ田舎だけど、小さいからこそ村人みんな仲良しである。

「――ミミちゃんみて！こんなにいっぱい、きのみみつけたよ！」

森の中、小さな子供たちと木の実拾いにやって来ていたミミは、聞こえてきた少女の声に顔を上げた。

亜麻色のくせっ毛の髪をふわりと揺らしながら振り返ると、小さな少女はかごいっぱいの木の実を差し出していた。

「わっすごい、本当にいっぱい！マリーは木の実集めが上手だねえ！」

村のみんなに珍しいと言われる翡翠色の瞳を優しく細めながら、少ししゃがんで少女の頭を撫でると、マリーと呼ばれた少女はえへへとほにかんだ。

「これだけあったら、明日のおまつりで、おりょうり作ってくれる？」

突然の少女の言葉にミミはきよんとする。

「え？」

「わたし、ミミちゃんが作るおりょうり大すきなの！」

よだれたれちゃう、と口元に手を持っていく少女に、ミミは頬が緩むのが止められなかった。

「…もう、マリーってば」

「ミミ姉ちゃん！ちよつときて！」

少女をぎゅうと抱き締めていると、近くで木の実拾いをしていた少年が、声をかけてきた。

「?…どうしたの？」

見ると、こいこいと手招きをしているので、少年のもとへ行ってみる。

すぐそばまで行くと、少年はミミに手を差し出した。

「これって、きの実じゃないよねえ？」

そう言って少年が差し出したのは、緑色の綺麗な石だった。

「……ん？」

「わあキレイ！なあに、これ！ミミちゃん。」

マリーが横から覗いてくる。

ミミは石を受け取りながら太陽にかざしてみた。

「うーん、なんだろう。木の実じゃないけど……。」

すると、透明に透き通った石がキラキラと輝くので、ミミは目をまんまるに開ける。

「えっ、これって、宝石……じゃないかしら。」

「ほーせき？なにそれ！」

マリーが再び訪ねてくる。

ミミはうーんと首をひねりながら口を開いた。

「ええと……貴族とか、お金持ちの人たちが持つてる、石のことだよ。」

「へーええ！」

関心するマリーの横で、石の拾い主の少年が立ち上がった。

「そこにおちてたんだよ。なんかよく分かんないけど、じゃあそれ、ミミ姉ちゃんにあげる！」

「えっ？でもこれ、きっと誰かが落としたんだよ。」

「うーん、じゃあミミ姉ちゃんがもっててよ！ぼく無くしそうだよん！」

あんまり興味がないらしい少年は、再び木の実取りに去ってしまった。

マリーもそれについていく。

「えええ……？」

ミミは呆然と立ち尽くす。

どうしてこんなところに落ちていたのかは分からないけど、とにかく誰かの落とし物だろう。

しょうがなくミミは、後で村長さんのところにでも持っていこう、と石をエプロンのポケットに入れたのだった。

田舎村にやって来た王子様＊2

ミミ・コティ——この小さな村に住む亜麻色の髪の少女は、そんな名前だった。

年は16歳と、この国の娘としてはそろそろ結婚相手を考えていかなければならない年齢である。

しかし色恋沙汰に興味のない少女は、家の手伝いと、子どもたちと外をかけまわること、毎日が過ぎていた。

お昼すぎ、ミミたちが村へ戻ってくると、森とピーシランクをつなぐ裏道の入り口に見知った少年が立っていた。

「トニー？」

ミミが声をかけると、家の壁にもたれていた少年は、明らかに動揺しながらこちらを向いた。

「あっ…、ミミ、お、おう！」

少女の幼馴染みの少年は、茶色の髪に、顔にはそばかすがある。いつもは仲間を引き連れてはミミにちょっかいを出しにやってくるのだが。

「どうしたの？」

いつもとは違う様子の少年に、ミミは首をかしげた。

「あ、ああのさ…。」

「トニー兄ちゃん、なんかへん〜!」

ミミと手を繋いでいたマリーのふと発した言葉に、少年はぎよつとする。

どうやら少年は、ミミが連れて帰った子供たちが視界に入っていなかったらしい。

「うわっ…おまえら、ちよつと、どっか行つてろよ!」

「ええ〜! トニー兄ちゃんこわい〜いじわるだあ〜!」

「うるさいっ早く行け!」しっし、と手を払う素振りをする少年に、子供たちは面白がりながら走り去っていく。

「ミミちゃん、また後でね〜っ」

そういつてあつという間に子供たちを追い払ってしまった少年に、ミミは眉を寄せる。

「…なに? どうしたの? ほんとに変だよ、トニー。」

少女の言葉は気にせず、やっとのこと二人きりという状況に満足した少年は、表情を改めた。

「あ、いや…あのな。」

そしてごはん、とひとつわざとらしい咳をする。

「明日なんだけど、」

「明日？」

きよとんとしてこちらを見つめるミミに、少年は顔が火照りだすのを自覚しながら口を開いた。

「…あ、明日のお祭り、一緒にまわってやってもいいぞっ」

最後まで言い終わる前に目をそらした少年に、ミミはえ？と聞き返す。

「だ、だから！お祭りだよ！どうせ一緒にまわる奴なんかいないだろっ」

「へ？いいよ、わたしマリー達とまわるから。」

「えっ!？」

さらっと答えた少女に、少年は目をむいた。

「マ、マリー達と？」

「うん。木の実のご飯も作ってあげるの。」

籠を抱きしめてにこにこ微笑むミミとは対象に、少年は口をぽか

んとあけてなんとも情けない顔になる。

「そんな……、いや待てよ！俺がどれだけ心を」

「大丈夫だよ。ありがとう、心配してくれたの？」

「ちがつ……！あ、いや、だから俺は明日ミミと」

「――なにあれ？」

ふとミミが呟く。視線は村の方を向いていた。

「おい聞ってるのかよっ！？」

意を決した告白を遮られた少年は、がっくりと落としながら少女の視線の先を追いかけた。

「あんなにみんな集まって、どうかしたの？」

少女が不思議そうに見つめる先には、村人たちがごった返していた。中には見慣れない軍服の人も混ざっている。

「あれっ？あの服……『碧の騎士』？」

たしかそんな名前の騎士団がこの国の王都にいたはずだ。
あの制服は、きっとそれだ。

「……ああ、なんか知らないけど、あいつら人を探してるんだってさ。」

「へえー…。」

興味がなさそうな少年とは違い、少女は人だかりの方を食い入るように見つめた。

「ていうかよく分かったな、あれが王都の騎士だって。ミミってそういうの詳しくあったっけ？」

「ううん、そんなんじゃないけど…。」

だって、騎士なんて、そんなめったに見られるものじゃない。村の女の子たちが噂しているのをちょっと聞いたけど、国を守るこの碧の騎士団は、近隣諸国ではずば抜けた強さを持っているらしい。

「…すごいなあ。」

それにあの真ん中にいる人なんか、すごく綺麗な金髪だし、遠くで見ても分かるくらい、整った顔——…。

少女がぼーっと金の髪を見ていると、少年がふとこちらを向いた。碧色の瞳が少女を捕らえる。ばちっと目が合ってしまった。

しまった、じつくりと見すぎた——、ミミはそう後悔するが遅かった。

少年は目を細めてこちらを伺っている。そして、一瞬びっくりした顔をした後、すごい形相になった。

「——ルイス！」

「えっ？」

叫ぶなりずかずかと近づいてくる少年に、ミミはおろおろと一歩下がる。

「わ、わあ、どうしようっ？」

しかし近づいてくる少年には、その行動など意味がない。

「ていうか、ルイスって誰……」

少女が呟いたとき、少年はもう目の前まで来ていた。

そして少年は、少女の腕を遠慮なくがしっとつかんだのだった――。

田舎村にやって来た王子様＊3

「おまえ、どれだけ探したと思ってるんだよ！」

たどり着くなり怒鳴り散らす少年に、ミミは「ええっ？」と言葉を漏らした。

（探したっ？なにを——わたしを？いやいやそんなわけあるわけないじゃないか。）

「あのー、ちょっと待ってください、わたし」

「いきなりいなくなって、エミリエンヌ嬢もすごく心配してたぞ。」

「エミ…？」

少年はそう言ってため息をつくが、ミミにはまったくわけが分からない。

なんだなんだこの人は。

人の話をまったく聞こうとしない。

「おまえ一体なんでこんなところに……くそ、場所変えるぞルイス。」

「えっ？」

言うなりミミの手をひき歩き出した少年に、横からもごもご何か聞こえてきた。

「――お、おいっ！その手を離せ！……おおお俺の、み…未来の嫁さんに」

そう言って指をさして怒った顔をしているのは、すっかり存在を忘れていたトニーである。

とてもさりげないつもりで最後に何かをつけたしているが、混乱しているミミには聞こえていなかった。

それどころか、ミミは腕をつかんできた少年に対して、考えた結果、こんな結論をだしたところだった。

「はっ…！まさか、不審者？」

一度そうだと思ってしまうと止まらない。
ミミは思いつきり叫んだ。

「きゃああー！はなしてください変態ー！」

「はあっ！？」

少女が急に発した言葉に少年はぎよつとする。
今まで大人しかっただけに、油断していたらしい。

「そっ、そそそりゃあ、ガン見しちゃってたのは謝るけど、いきなりどこに連れてくる気ですか！？」

「連れてくっておまえ、俺はおまえが話せるところに、」

「へんたい！へんたい！へーんーたー…ふがっ？」

そこで少年に手で口を塞がれた。

しかしミミは思いきり噛んで抵抗する。

「いっ：おまえ！やめろ！碧騎士がくるだろ」

「くるだろって：あんたも騎士でしようっ！？」

それなのにこんなことしていいと思ってるのかー！と叫ぶと、さすがに少年は違和感を感じたらしい。

「……？なに言ってるんだ、おまえ」

ミミの言葉に少年はかたちのいい眉をひそめた。
そして――、

「あれ……？」

少年は少女の顔をまじまじと見た。

そして髪の色を見て、体を見て、それからつかんでいる腕の感覚を確かめる。

「お、女の子？」

「はっ？」

金髪の少年は、ぽかんと口を開けて、なんともなさけない顔をしている。

「……君まさか、キトル家の子？」

「え？」

「あ、違うのか。じゃあ、従姉妹かはどこか…？ いやでも、」

「ちよちよっと待ってよ！ さっきから、一体何言ってるの！？」

少年がそのまま考える体勢に入っただので、ミミはあわてて口をはさむ。

「あー……。」

すると、少年は少しだけぼつな顔をして——少女にとってとんでもない事を吐き出した。

「…ごめん。君がその、知人の…男の子にそっくりだったから。」

「——おおお男の子っ！？」

（——そこかっ！ 変態じゃないのなら、誰かと勘違いされてるんだとは思ったけど、まさかの男の子かっ！）

ミミは軽く、というか結構なショックをうけて、少年をきつと睨んだ。

「あなた、すごーく失礼ですよっ！」

「だから先に謝っただろ！…ていうかおまえも大概失礼だ！ 人の事変態呼ばわりしやがって」

こっちもこっちでショックを受けていたらしい少年は、ミミの言葉に開き直る。

ミミのことを指すのが『君』から『おまえ』に変わったところから、素はこっちなのだろう。

「だっ、だってそれはあなたがいきなり腕つかむから！」

「そりゃあお前、これだけそっくりだったら……」

ふと少年が黙りこんだ。

少女が首を傾げると、少年がこちらを改めて見つめてきた。

「わ……、」

どきりとした。

そういえば、男の子と間違われた云々をなしにして、顔だけを見れば、この少年はとても綺麗な容姿をしているのだ。

「おまえ、」

「でん——リユシリカ様！どうかされましたか？」

少年と誰かの声が重なった。

少年の眉間にしわが寄る。

ちっ、という舌打ちが聞こえたのはたぶん、気のせいじゃないだろう。

「——別に何も、」

少年はミミを隠すように移動するが、遅かった。
そのまゑに騎士がミミの顔を見て、ぎよっとする。

「…っ！ルイス殿下！？」

信じられないものでも見たかのように目を見開いた騎士に、ミミは
むっとした。

また『ルイス』だ。

そんなに似てるのかな。

しかもこの人、まるであたしが女の子の格好してるのがおかしいみ
たいに、顔ひきつつちゃって……！

「――この通り、ピーシランクにてルイスを発見した。」

凜とした声が、響いた。

言葉を発したのは隣にいた少年である。

その意を決したような表情に、ミミは首をかしげた。

「え、なに言ってる…」

「よって、式典に遅れないよう、俺とルイスは先に王宮に戻る！全
団員に伝えてくれ！」

言い終わるなり、少年はミミの腕をひっぱった。

「来い！」

「えっ？なに！？」

ぐいっと引っ張られてよろけた少女の手から、大事に抱いていた籠がすべり落ちた。

「ちょっ…！わあ、木の実が！」

ころころと転がる木の実達に、追いかけようとしていた騎士はおろおろとしてとどまっている。

「ほっとけ！」

「ほ、ほっとけて！あれ明日使うのにつ」

「知るか！」

「なんですってえ！？」

少年の言葉に目をむくが、少年はまったく聞いてくれない。

ミミはそれからもけっこう叫んだが、そのまま走って森まで来てしまふ。

森の中程まで来ると止まった少年を、少女は肩で息をしながらきくと睨んだ。

「ちょっと！人違いだったんでしょ！だったらもういいじゃない、なんであたしまで連れて来るのよ！」

「気が変わった。」

「はっ？」

少年は、服の乱れを整えながら淡々と答えた。

「おまえには、一緒に城に来てもらう。」

「し、城？」

いま、城って言った？なに言ってんだ、この人。

「城って、何いってるの。」

たぶん、ものすごく間抜けな顔だろうと自覚しながら、少女は少年に問うた。

「……この国の、第二王子の名前を知ってるか？」

「へ？ええと…」

問いを返されて少女はぱちくりとする。

ペルティエの陰の第二王子、…いろいろと噂がある王子だ。

「確か、ルイス・キトル——」

そこまで呟いて、少女はぴたりと止まる。

ルイス？

それは、さっきまで聞いていた名前…

「え、え、まさか」

少年がにやり、と笑う。

「そうだ。おまえは、ペルティエ国第二王子——ルイス・キトル・ペルティエに、そっくりなんだ。」

ミミはこれでもかというくらいに目を見開く。

目の前に立つ金の髪の少年は、まるで悪魔のように笑っていた——
|。

田舎村にやって来た王子様＊4

「……そんなわけ、」

「――あっ！こんな所にいらっしゃったんですね！殿下！」

がさごそと、草木をかき分けながらやって来たのは、またもや碧の騎士の服を着た青年だった。

さっきの人とは別の人みたいだ。

黒髪と同じく黒い瞳が、何故だかたよりなさそうに見える。

「……何でそんなところから来るんだよ、エド。」

普通に道があっただろう、と少年は、明らかに自分より歳上だろう青年を、鬱陶しそうに振りかえった。

「いやあ、ちょっと迷ってまして……じゃなくて、みんな探してましたよ！ルイス様が見つかったって。」

体についた葉っぱを取りながら青年は、少年ともう一人の存在に気づき、顔を上げた。

「あれ、こちらの方は……うわあっ」

驚いて飛び退いた青年に、ミミもびくつと肩をすばめる。

「ルイス様、実は女装趣味が……？」

何とも言えないような、微妙な顔でミミを見つめる青年に、少年は呆れた声を出した。

「違う、よく見ろ、別人だ。」

「えっ！……わあ、本当だ」

少年に突っ込まれ、青年は黒色の瞳をまんまるに開ける。

「これはまた……そっくりな方を見つけましたねえ。」

青年は興味深げにミミを眺めて、それから一歩近づいた。

「失礼致しました……初めまして。私はエドゥアールと申します。」

青年はにこにこと、人懐こそうな笑みをこちらに向けながら、胸に手を当て騎士のお辞儀のようなものをした。

ミミははあ、とまぬけな声を漏らす。

「本当にそっくりですね。瞳の色が少し違うけど、大体の人には分からないでしょう。」

「ああ、もう決まりだ。」

「……そうですねえ。」

（……………ん？）

そこで話の流れに違和感を覚え、ミミは口を挟んだ。

「ちょっと待って下さい、決まりって、なにが？」

「だから、おまえにルイスの身代わりをしてもらうんだよ。」

「……………はあぁっ!？」

すっとなきような声を出した少女を見て、少年は眉を寄せて、ためいきをつく。

「さっき城に来てもらう、て言っただろ。話を聞いてて分からなかったのかよ。」

「だ、だ……」

だって、そんなこと…誰が想像つくもんですか！
少女は拳をぎゅっと握って反論する。

「むむ無理です無理ですっ!……………ていうかわたし、女なんですけどっ? 王子様って、男の子でしょう!？」

「あたりまえだろ。大丈夫、お前ぺったんこだから」

「ぺっ……………!？」

さらりと言われた少年の言葉に、ミミは真っ赤になってぱくぱくと口を動かした。

「…ひ、人が一番気にしていることを、あっさりと言ったわね!？」

「…しようがないだろ。だって、俺がルイスと間違うくらい、おまえ本当ペったん…」

少年が言い終わる前に、少女は拳を思い切りぎゅっと握りしめる。

「だ……、」

次の瞬間にそれは、金の少年の顔面に向かっていった。

「だまれこのイケメンな変態めーっ！」

ばーんとものすごい音が辺りに響くと共に、衝撃を喰らった少年は後ろにしりもちをつく。

「な……………」

男2人は暫くぽかんと固まっていたが、がさつと鳥が飛び去った音に、少年がはっと意識を取り戻す。

「…………ふ、ふつう顔殴るかっ!？」

意外と強かった力にびっくりしながら睨むと、少年に鉄拳を喰らわした犯人である少女は、ふん!とふんぞりかえった。

「変態にはそのくらいしなくっちゃ意味ないでしょう」

「女の子だろっ? 普通はビンタとかだろ!」

「どこのご令嬢よそれ! あたしは田舎の小娘よ! そんなお上品じゃ

ないわ!」

「だからってぐーはないだろ……」

少年が呆れ返ったところへ、遅れて意識を取り戻した青年が、慌てて駆け寄ってきた。

「…だ、大丈夫ですか殿下!？」

「おまえは遅い!」

叱られたエドゥアールはしゅんとしながら、でも…と呟いた。

「殿下も殿下ですよ…。女性に対してすつごく失礼なことを……。」

「男の顔を思いっきり殴るのが女なのか!？」

「それはまあ……、ぶふっ!イケメンな変態……!」

「っ!笑うなエド!」

青年に笑われて、少年は顔を赤くしながら怒鳴る。
しかし逆にツボにはいってしまったらしい。

「だ、だって、…ぶふー!」

「うるさいっ!」

たまらなくなつた少年は青年の頭に拳骨を落とした。

「いてっ！な、何するんですか殿下！？」

頭を押さえながらエドゥアールが訴えると、少年は悪びれもせず
答える。

「おまえが笑うなど言ってるのに止めないからだ。」

「そんなー！八つ当たりですかっ？」

「うるさい黙れ一時しゃべるな！」

「えええー！」

2人が言い合いを始めていると、少女がふと入ってきた。

「あのう、あたしも帰っていいですか？」

「あ！駄目です駄目です！待ってください！」

慌てて少女を止める青年に、ミミは困ったような顔をした。

「え…でもあたし、ほんとに王子様の身代わりなんてできませんよ
？」

「それは大丈夫です！本当にそっくりですから！」

「いやあゝ、あたしこんな平民だし、たぶんすぐばれちゃいそう…」

「い、1日です！1日だけでいいんです！5日後に、式典があるので、それだけやり過ごせば…」

「いちにち…?」

1日くらい、いいかな?と考え始め、しかしすぐにミミははっと顔を上げた。

「あっだめだ!明日は村のお祭りがあるの!」

「お祭り、ですか」

残念そうに少女を見返すエドゥアールの横から、今まで黙っていた少年がふと声を上げた。

「そんなのどうでもいいだろ。」

「どうしても良くないわよっ!すっごく大事なお祭りなんだから!」

「こっちだってすっごく大事な式典なんだよ。」

「知らないよそんなのっ」

少女がきつと睨むと、少年はめんどくさそうに見返してきた。

「……いい、もう連れていく!…エド!」

「は、はいっ!」

そばでオロオロと成り行きを見守っていたエドゥアールが跳ね上がって去っていく。

ミミが首をかしげていると、しばらくして青年は馬を二頭つれて戻

ってきた。

「？」

それを確認した少年は、ミミに近より、ひょいとお姫さまだっこをする。

「うひゃあっ？ ななに、何でっ！？」

慌てる少女を馬上に降ろして、自分も乗ってくる。

少年の腕に挟まれる格好に、ミミは引きつり顔になった。

「待って待ってわたしの意見は！？」

「知らん、時間がないから、一緒に来てもらう。」

エドゥアールももう一頭に乗ったらしく、二頭が動き出してしまった。

「いやっ……！ 降ろしてっ」

「暴れるなよ。落ちたら死ぬぞ。」

「……………」

ぴたりと止まったミミに満足そうに笑いながら、少年は馬を走らせる。

「すみません、国を助けると思っていただけ……」

横からすまなそうに青年が声をかけてきて、ミミはがっくりと肩を落とした。

「そ、そんなあ……………」

ぱから、ぱから、馬の走る音が森に響く。

「ううう……………」

あきらめた。

もうあきらめた。

くそう、あの時少しでもかっこいいなと見とれてしまった自分を恨んでやる…。

「……碧の騎士は英雄だなんて、うそっぱちだあ……………」

腕の中からぽつりと聞こえた言葉に、少年はまさか、という思いで呟いた。

「…言っとくけど」

「なに？」

「俺は、碧騎士じゃないからな。」

「えっ？」

だって制服着てるじゃない、と言う声に、少年は呆れまじりのため

息をつく。

「……リュシリカ・アラン・ペルティエ。」

「え？」

急に呪文のようなものを言われて、ミミは意味が分からず聞き返した。

「俺の名前だよ。リュシリカ・アラン・ペルティエ」

「ペル……」

少年の言おうとする事にやっとのこと気付いて、少女は目をまんまにする。

ペルティエ、この大国の名を名乗ることを許されているのは、

「言い忘れてた、というか、言わなくても分かっていると思ってたけど」

：そういうえば、エドゥアールはこの少年のことを『殿下』と呼んでいなかったか。

「俺は、このペルティエの第一王子だよ。」

少女の目がまんまるに開かれる。

「……っ！ええええええー！？」

少年が顔をしかめる。
森中に木霊しただろうそれは、今日一番の少女の叫び声になった。

白いお城と身代わりの少女＊1

ピーシランクから北へ2日、馬車で走り続けると、その首都は見えてきた。

カルナーダ、この国のすべてが行き交う、中心の街。

「ミミさん、見えましたよ。」

ガタガタと揺れる馬車に、お尻が悲鳴をあげていた少女は、黒髪の青年の声にふと顔を上げた。

「……………わあ！」

窓から顔を出したミミは、遠くに見えた大きな街に、歓喜の声を上げた。

「あれが、王都カルナーダだ。」

少年が街の名前を教えてくれたが、少女は目の前の景色に見とれて聞いている。

「すごい……大きい！」

あの小さな村を出たことがない少女にとっては、すべての光景が初めてみるものである。

そして――何故少女が馬車に移っているのかというと、結果意味が分からないことだった。

最初は少年と一緒に馬に乗られて王都を目指してたのだけど、少年が途中ぶつぶつとうるさかったのだ。

馬の上では「あんまりひつつくな」だの、野宿するときは「男の横でぐうぐう寝るな」だの、意味の分からないところでいきなり怒りだすので、少女は首を傾げるばかりだった。

そして何か堪えられなくなったらしい少年が、1日すぎたときに馬車を調達してきたのだ。

「馬乗りに慣れていないからキツイだろ」と少年は言ったけど、実際体が痛くなっていたので、少女はありがたく馬車の中で眠らせてもらった。

「……………それにしても、」

ミミは呟きながら、馬車の横を馬に乗って走っている少年をちらりと盗み見た。

…こいつが、この国の王子様？

少年はマントのフードをかぶって、目立つ金色の髪を隠すようにしている。

その下から伺える整った顔は、今は仏頂面であった。

「あんなところに王子がいるなんて、気づくわけないじゃん……。」「まったくひどい話である。

少女はこの国の王位継承者に、変態だの不審者だの叫んでいたのだ。だいたい、騎士服なんて着ていて、気づけというのも無理なのだけど。

「…は！まさかあたし打ち首っ？」

「そんなことするか！」

アホかおまえ！と横から怒鳴られて、少女はむっとする。主語を言っていないのに何のことか分かったらしい少年に、また悔しくなった。

「え、だって…」

「ミミ様、リュシリカ殿下はそのようなことはしませんよ。」

エドゥアールがにつこりと柔らかく口を挟んできたので、今度はしゅんと肩を落とした。

しかし視界の端に見えた建物に、少女は再び顔を上げる。

「あっ！あれがお城ですか？」

カルナーダの中に入ると見えてきた、白亜の王宮。

高い城壁に囲まれて、それでももつと高いお城が構えているのが見える。

ミミが目キラキラさせて、見とれていると、ばしっと頭を叩かれた。

「いたっ！」

「いいかげん頭をひっこめろ。誰に見られるか分からないだろ。」

「…だからって、叩かなくなっちゃっていいじゃない……。」

叩いた犯人である少年を睨みながらも、ミミは大人しく馬車の中に顔を戻した。

確かに身代わりが出来るほどそっくりらしい自分が、そのルイス王子を知っている人に見られると、まずいことがあるかもしれない。

「このまま城まで突っきるぞ。」

低い声で言った少年に、ミミは無言でうなずいて、ぱたんと窓を閉めた。

「……………ふおお…。」

高い天井に、広い廊下、

中庭には色とりどりの綺麗な草花たち。

柱や壁には、隅々まで一切手の抜かれていない細かい彫刻が掘ってあり、この国の技術がここに集中していることが伺える。

「あ、ミミ様、こっちですよ。」

あれからお城に着いたミミ達は、目立たないよう裏門から入った。裏側だからといって入ってしまうと王宮には変わりないのだから、豪華さにはびっくりする。

ついつい少女がしゃがみこんで見入ってしまったっていると、いつのまにか少し先の方に行ってしまったていた青年に声をかけられた。

「わ！はい！ごめんなさいっ」

ミミが慌てて駆け寄ろうとすると、途中にあった壺につまずいてしまった。

「ひー！？」

真っ青になった少女が慌てて壺を抱きとめると、それを見たエドゥアールがふふつと笑う。

「大丈夫ですよ。そこら辺のものは比較的安いものばかりです。」

「比較的って何！？どれと比べているんですかっ？」

あわあわと壺を元に戻してからエドゥアールのもとへ駆け寄ると、横で一緒に待っていた少年が呆れたようにミミを見てきた。

「おまえちょっと静かに出来ないのかよ…。マント貸した意味ないだろ。」

そう言われてはつとしたミミはフードを深く被り直す。

王宮内に入ってからルイスを知る人間が増えるからと、少年が脱いで貸してくれたものだ。

「…おまえじゃないもん。ミミだもん。」

少女が少しだけ拗ねたように呟くと、金の髪の少年は、ぴたりと足を止めた。

「……………み」

「ていうかエドゥアルさん、お城ってすごく広いんですね！」

ミミが少年の言葉を遮り、興奮したように言うと、青年はぶつと吹き出してからにこりと微笑んだ。

「あっ…………え？ああ、そうですね。僕も初めて来た時は驚きましたよ。お気に召されました？」

「ええと、はい！…とゆうかあの、迷子になっちゃいそうだなって…。」

「その顔で迷子になられたらすごく迷惑だ。部屋についたら王宮内図を見ておけよ。」

口を挟んだ少年がなんだかさつきよりも不機嫌になっていて、少女

は首をかしげながら答える。

「…？、分かってるよ。」

「ミミ様大丈夫ですよ。僕もここに来たばかりの時は毎日迷っていましたが。」

「えっ毎日？」

びっくりしたミミとにこにこ微笑むエドゥアールの横で、少年が顔をしかめた。

「…こいつは極度の方向音痴なんだよ。」

「へええー」

「最初のうちは不安もあるでしょうけど、私達はミミ様の味方ですから、ご安心ください。」

胸に手を当てながら言った青年は、本当に頼りになってくれそうで、ミミはほっと肩を下ろしながら笑い返した。

「……ありがとうございます。」

頑張ってみようかな、と思った。

こんな自分が、この大好きな国の役にたてるのなら。

最初は災難だったけれど、ここまできたんだから。

この嫌な王子のためじゃなくて、国のみんなのために。

ミミはこっそりと決心して、ぺこりと頭を下げる。

「よろしくおねがいします。」

……やってみよう。

出来ることだけ、ちよつとだけ。

そのふわりと笑った笑顔に、青年と少年が目を見開いたことには、気づかなかった。

ミミたちが、廊下の角を曲がったとき、ぱたぱたと駆け足が聞こえてきた。

…ぱたぱたというより、どたどたかもしれない。

見ると、ものすごい形相の侍女がこちらに向かって走って来ていた。

「っ?」

びっくりして見ていると、その侍女はミミに一直線で向かって来る。

「ル、イ、ス様ああ!」

「えっ?」

侍女は、こちらにたどり着くと共に、ミミに飛びついた。

「ふぎゃっ…?」

「ルイス様っ! 今までどこにいらっしやったのですか!」

「え、え?」

「お出けなさる時は、一言おかけになって下さいと、いつもあれだけ言っていましたのに! 皆様どれだけご心配なさっていたことか!」

この侍女は、どうやらミミをルイス王子だと間違えているようだ。

どうしたらいいか分からないでいると、エドゥアールが口を挟んだ。

「コレット、ちょっと待って下さい。その方はルイス王子ではありませんよ。」

えっ、ばらしていいの!?

あっさりと否定をしたエドゥアールをミミが驚いて見ていると、コレットと呼ばれた侍女はきつと青年を睨み返した。

「エドゥアールは黙っていてください! 私は今ルイス様と話しているんです!」

そう言いながらミミの襟首をぐわんぐわんと激しく揺らすので、ぎゅっと首が締まる。

「ぐえっ……」

「おいっコレット手を離せ、そいつ意識が…」

慌てて少年が二人の間に入ってきて、驚いたコレットはミミの頭をゴツンと壁にぶつけてしまった。

「あっ」

「え？あら、リュシリカ様もおかえりなさいませ。…え、手？……きゃあ！」

「……………コレット。」

「……………あ！この方、ルイス様じゃありませんわっ」

少年と青年が、呆れたように侍女を見下ろす。

コレットの腕の中では、フードの取れて現になった亜麻色の髪の少女が、目を回して気を失っていた。

白いお城と身代わりの少女＊1（後書き）

新しい子が出てきました。これでだいたいの登場人物はそろった…
…かな？

こっちのお話は長期で続けるつもりですが、よろしくお願いします
（^^*）

お気に入りと評価、ありがとうございます！

白いお城と身代わりの少女＊2

「――大変申しわけありませんでしたっ！」

「も：もう大丈夫ですよ。それよりも、コレットさん、運んでもらってありがとうございます。」

豪華な天蓋付きのベッドの上にいるミミは、今にも頭を床につけそうな勢いの侍女に、眉を下げた。

「いいえ！全然大丈夫じゃありませんわ！」

くわっと目を開けながら顔を上げた侍女に、ミミはびくつとする。

「話は聞いております。私責任をとって、ミミ様をルイス様にこれでもかってくらいそっくりに仕上げさせていただきますわっ！」

「えっ、そっち？」

少女は顔をひきつらせた。このルイス王子専属の侍女のコレットは、なんだか変な方向にがんばってしまいうらしい。

気を失った自分を男達には任せずに、コレットが部屋まで運んでくれたと聞いたときは、本当にびっくりした。

「本当に大丈夫ですか？僕たちには気を使わないでいいですよ。」

水差しからコップに水をそそぎながら、エドゥアールが心配そうに声をかけてくれる。

「はい！あたし、体だけは丈夫なんで本当に何ともないんです。」

コップを受け取りながらそう言うと、2人は安心したように笑ってくれた。

ありがとうございます、と言って少女は水をごくごくと飲みほす。冷たくて、すっと喉を流れる水に、頭が冴えてきた。

そこでふと1人いなくなった存在に気がつき、ミミはきよろきよろと広い部屋を見回す。

「ああ、殿下はちょっと報告に行ってるんです。ミミ様が来て下さった事によって、いろいろ予定が変わるので。」

にこりと笑う青年に、ミミは苦笑する。

来たというか、いきなり連れて来られたのだけど…。そう心の中で思いながら、少女は言葉をつづけた。

「あの嫌々な人は、ほんとにこの国の王子様なんですか？」

少女が顔をしかめながら言った言葉に、エドゥアールは微笑んだ。

「そうですよ。あれでも立派なペルティエ王国の第一王子です。」

「……あんなに意地悪なの？」

「ふふ、そんなに嫌わないでさしあげて下さい。…あれでも、ミミ様をちょっと好いておられるようですし。」

「えっあれがですか!？」

少女が目を見開くと、青年は優しく目を細めて少女を見返してきた。…まるで、弟のことを想うような優しい顔で、少しびっくりしてしまう。

「殿下は、あまり他人に心を見せたがらない方です。…でも僕は、ミミ様はなんだか他の人とは違うような気がするんですよえ。」

につこり微笑まれてミミは困ったような笑顔を返した。

「……まったく分かんないです」

どこをどう見たらそう思えるのか。

ミミは理解できないけど、隣で聞いていたコレットもうんうんと肯定しだした。

「それは私も思いましたわ。あのリュシリカ様が、素でいらっしやったように見えましたもの。」

「す?」

ミミが首をかしげると、コレットはふふ、と笑いながら答えてくれた。

「気を許した者というか、一部の方だけには、あんな風に態度が変

わるのですわ。さいしょっからあなのは、ミミ様が初めてだと思います。」

「…ええと、意地悪になるってことですか？」

いまいちよく分からないでいると、エドゥアールが口を挟んできた。

「というより、出会って最初にミミ様にぶっ飛ばされてしまったので、今さら大人ぶるも何もないんじゃないでしょうか。」

「まあっ！ミミ様ったら、リュシリカ様をぶっ飛ばしたのですかっ？」

青年の言葉にコレットがびっくりしてミミを見てくる。

「う…：あ、はい。」

あんまり良いことじゃないだろう、と目を伏せて答えると、急にがしっと手をつかまれた。

「さすがですわ！あのリュシリカ様をぶっ飛ばせる方なんて、そうそういません！私、ミミ様を尊敬いたしますわ！」

ぶんぶんと手を上下に振りながら、コレットは目をキラキラさせる。

「え…、コレットさんも、リュシ何とか王子のこと、殴りたいんですか？」

少女は顔をひきつらせる。

ミミが少年に鉄拳を落とせたのは、まだ少年が王子だなんて知らない

かったからだ。

「まあっ、その殿下の名前を覚えきれないところも素敵ですわ！はい、時々イラッときたとき、張り飛ばしたくなりますわ。」

「…へ、へえ……。」

きやあ言ってしまいましたわ、と頬を染めるコレットに、ミミがどう反応しているのか迷っていると、扉を叩く音が聞こえた。

「――何騒いでるんだよ、おまえら。」

呆れた声と一緒に扉から顔を出したのは、仏頂面をした、噂の第一王子だった。

少年が部屋に入って来るのを見て、コレットはすました声を出す。

「あら、おかえりなさいませ。リュシリカ様。」

今の聞かれてたのかなと少女がコレットを見ると、何を考えたのか分かったらしい彼女はにっこりと笑った。

「大丈夫ですわ。リュシリカ様はこの顔が常でいらっしゃいます。」

「えっ」

「どういふことだよ、コレット。」

「何でもありませんわ。お気になさらないでくださいまし。」

それきり片付けに取り掛かるコレットを不思議そうに見た後、少年は少女を向く。

騎士の服を着替えた少年は、改めて見ると、少女と近い歳だと分かった。

少女と同じか、一つ二つ上くらいだろう。

「式典のことだけど、大臣と話した結果、5日後に行われることになった。」

サラサラの金髪に碧色の瞳、しかもすごく整った顔立ちで…、くやしいけれど、今は完璧に王子にしか見えなかった。

むむう、と少年をねめつけるミミの横でエドゥアールが驚いた声をあげる。

「あれっ、延ばしてくれたんですねえ。」

「ああ、ルイスが帰ってくるなり体調が悪いつて事にしといたから。」

「まあナイスアイディアですわ！良かったですわね、ミミ様。日にちが延びましたよ。」

につこりとコレットが振り返ったので、ミミははっと背筋を伸ばした。

いけないいけない、ヘンタイ野郎に見とれちゃうなんて！

…あ、見とれてたんじゃなくて、睨んでただけど。

目をつぶってぶんぶんと首をふる少女に、コレットが首を傾げる。

「ミミ様？」

「え？あ…え？」

「ちゃんとしろよ、お前。大臣が後で様子見に来るって言ってたぞ。」

眉を寄せながら少年にそう言われ、ミミの意識ははっきりと覚醒した。

「……えええっ!？」

コレットとエドゥアールも驚いた顔をしている。

そりゃそうでしょう。

…あたしもびっくりだ！

「こ、こんなに早く出番がくるなんて、聞いてないよっ」

「…ごめん。止められなかった。」

バツが悪そうに顔を歪める少年を見て、ミミの横にいたコレットががばっと立ち上がった。

「大変ですわ。それなら急いで準備いたしますわね！」

コレットが慌てて部屋の外へ駆けていく。

「え…?」

「急だから仕方ない。まずは外見だけでもルイスにしておくぞ。」

少年がそう言うのと同時に扉が再び激しく開けられた。

「戻りましたわっ!」

「うわあ!は、早かったですねコレットさん!」

びっくりして声をあげると、何故かコレットは恥ずかしそうにもじもじとした。

「うふふ、お褒めのお言葉ありがとうございます。」

いや、そういうわけじゃないけど。

戻ってきた彼女の手には、金色に煌めく毛束と、男物の衣裳があった。

「……それは、」

何ですかと問う前に、エドゥアールがミミの肩にぼんと手を置く。

「大丈夫ですよ、ミミ様。こう見えてもコレットは、王宮の衣裳、美容に精通しているんです。安心してすべてをお任せください。」

「……はい?」

「頼むぞ。コレット。」

少年の真剣な声に、コレットがきらっと瞳を光らせる。

「ええ、お任せ下さい。」

そして先程言っていたものより勢いよく、高らかに宣言した。

「…わたくし、世界中の誰が見ても騙されてしまうくらい、ミニ様をルイス王子そっくりに変身させて頂きますわ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5997w/>

少女王子さま

2011年11月20日01時20分発行